

Title	H・ D・ ダンカン著 中野秀一郎 柏岡富英訳 『シンボルと社会』
Sub Title	H. D. Duncan (translated by H. Nakano and T. Kashioka), symbol and society
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1976
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.6 (1976. 6) ,p.122- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19760615-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

するところである。

しかしながら、他方、刑法典をはじめとする刑事法の規定は、今では、著しく時代遅れになつてゐる。このときに當つて、比較的新らしい法典で、多くの先端的な改革を試みてゐるスウェーデン刑法典、しかも、社会の動きに即応した部分改正を怠りたく続てゐる同国の立法状況について、つぶさに検討することのできる本書が公刊された意義は極めて大きいといわねばならない。

刑事法の比較に際して、わが国の法典も例外なく欧米語に訳されて、その批判の対象となる。日本語という言語の障壁に守られ、人に見せるのをはばかるような古い内容の改正案を造ることなど、そろそろ止めた方がよい。それに対する警告という意味からも、本書を多くの人々に推奨する次第である。

宮沢 浩 一

H・D・ダンカン著

中野秀一郎・柏岡富英訳

『シンボルと社会』

※

戦後社会科学は規範性を脱することで「科学」志向を強化した。それは民主主義の、それも西欧民主主義の教義を歴史普遍的に確定したからにはほかならない。しかし、この「普遍性」が確定されなかつたらどうなるのか。さらには、人間の思惟が教条化された民主主義

義に閉じこめられずに、むしろそうした民主主義のよりさらなる展開を志向して躍動したら、その思惟やそれに発する行動動機は、それだけで反民主主義の烙印を押されることになるのだろうか。

われわれが離脱しようとしている状況は、まさしく知的に人間を、社会を、そして世界を、すなわち「歴史」を理解することに連なつてゐる。それは仮説設定——分析——説明といった論理プロセスに科学を押し詰めることから、科学を人間に連接して、そこから新しい科学の在り方と方法を求める方向への摸索にちがいない。その意味からすると、分析哲学や操作主義に対する重大な批判を媒介とする新しい思考が重大になる。社会学や経済学がその学問的（科学的）先進性と自己完結性を自己批判し、ラディカル・ソシオロジイやラディカル・エコノミックスとしてみずから学問的流動性の中に投じていつたことには、したがつて、こうした知的転換をみずからに課した、誠実な知性が重大に定礎されてゐるといえる。

こうした試行が確定的な目標なり志向を発見したなどは、もちろん、いえるはずがない。いいかえれば、現代科学はT・クーンのいう「科学革命」のその前夜にさしかかつてゐるだけに、科学者はいわば各自が何らかの形で自己の領域を点検し、その領域を拡大しながら、他者の領域と意識的に交叉させることで、自己の認識の世界を拡大しなければならなくなつてゐる。

いつても、それは社会科学者すべてにたいして大理論の構築へと志向する要請を意味するものではない。私がいいたいののは、自身の認識対象を社会から人為的にもぎとつてしまひ、そこに埋没す

ることで科学を僭称してはならない、ということである。自己の認識世界をつねに社会大に拡大しつつ、その世界とのかかわりで、部分の追求を行ない、そこで認識的に確認できたものを、社会的有意性のフィルターにかけることで、社会との関連の意義を求める、そうした相互作用に自分をおきつくす必要があるにちがいない。本書をとりあげたのも、実はこうした私の考え方によつてゐる。

※※

ダンカンが「象徴的相互作用説」に発端していることは、行論から明らかであるばかりでなく、訳者中野秀一郎氏も指摘するところである。この社会学理論は、「人間行動の言語的構造化の問題を提起し……より適切なパーソナリテイの理論を発展させ、人格と社会構造の連繋へ数歩の前進をした」(D・マーチンデル、新睦人はか訳『現代社会学の系譜』未来社、一九七一年、下巻、四〇六ページ)と指摘されているように、社会行動論の領域において「社会学者が通常『相互作用』として理解している自他の交渉をその主観的要素——動機、欲求、手段目的、知識など——を中心に解釈しようとする」(中野秀一郎「あとがき」二八五ページ)点で、現在の社会科学が「人間」と「社会」に対して、新しい切りこみ口を搜索する上で、重大に評価され、あるいは展開されている方法である。

しかし、政治学の場合には、なぜ人間は、現に人間が行なつてゐるように、政治的な行動をするのか? (H・ニューロー、内山秀夫訳『行動政治学の基礎』東海大学出版部一九七五年、二ページ)として問題

を提起した行動論が、必ずしも「人間」を政治的なかかわりで腑分けすることができず、つねに媒介項(たとえば政治文化)に力点を置くことで、人間と政治体との関連を追求する、という人間観を明らかにすればするほど、逆に人間が抜け落ちてゆくジレンマに立たされてきた。

いわば、人間は類型化を前提とされた、政治的人間であるか、人類と等置されて成立する大範疇にされやすい。このいわば政治学の陥りやすい畏に、「象徴的なものを主観的なものと混同している」(三ページ)アメリカ社会学との共通性を見ないわけにはゆくまい。それは学問方法論としての主観性か、客観性かの問題としてではなく、人間における主観を客観化する方法に何らかの欠損があるのではないか、という想いをあたえる。ダンカンがM・シュラーに語らしているように、

「すべての近代の価値の理論は、価値というものは、そしてなかく、すぐ道徳的価値は、人間の心の中の単なる主観的な現象で、それ自身なら独立した意味も存在も有してはいない」という前提を共有している。この見解に従えば、価値とは欲望や感情の単なる投影物にすぎないことになる。」

この「近代の価値理論」こそが、現代の社会科学において問題とされねばならない対象にちがいない。その場合、社会学において人間と社会がどのように連結するののか、そしてまた社会を人間と人間の関係において認識しあげるとしたら、そこで成立する社会秩序とはいかなるものになるのか、が屹立した問題になる。そこには経済

的諸要因からの、あるいは政治的諸要因からの決定論を許さない重大な位相が存在するにちがいないのである。

さらに社会システム論に表象される機械論的視座も否認されるべき何ものかをもっているはずである。なぜなら「社会学のすべての理論を物理学に由来する研究モデルに還元してしまうことは、社会学者が意味を取り扱うことを不可能にしてしまうだけだからである。行動学派の社会学者たち（大多数のアメリカの社会学者はここに含まれてしまう）は、もし論理的な一貫性を保持しようと思えば、その研究モデルから、意識、意図、意味などという言葉を追い出してしまわなければならない」（五一六ページ）からである。

かくしてダンカンが「意味の社会学」を求める視角を明らかにして次のようにいう。

「意味について何事かを語ることなしに人間関係について語ることはできない。そして意味は、それが『形相維持』と呼ばれているときでも、通常はシンボルの解釈を通して研究される。なぜなら、意味（注意および意図として）が観察可能なのはただシンボルにおいてのみだからである。」（六六ページ）

この「シンボル」への知的凝結は、シンボルと出来事との関係において、ダンカンに「コミュニケーション」の社会的意味の追求へとむかわせる。

「シンボルと出来事との関係は、われわれが行おうとしていること、およびそれをどのように行おうとしているか（方法）の両方によつて決定される。そしてこの目的と方法とは共にコミュニケーション

ーションの中で生起するのみで、コミュニケーションに関するデータは社会的資料としては第一義的なものである。人間関係においては、『関係性』とはコミュニケーションの中で経験されるような関係性である。」（七一八ページ）

その場合のコミュニケーションとは、「他者を（従つてまた自分自身を）説得して所与の社会秩序を創造し、疑い、あるいはいついにはそれを破壊するために必要だと考えられている一定の行為に向かわせようとする一つの試み」（一九ページ）と考えられている。したがつて、ダンカンが想定する人間世界は、たとえばマス・コミュニケーションのように送り手と受け手が主客関係として設定されているものではなく、まさしく相互作用の担い手としての人間のもつ「意味」のコミュニケーションによつて結びあわされる世界であり、そうしたコミュニケーションの意味表象としてのシンボルによつて統合され、破壊される世界である。

こうした人間のたえず、まいをダンカンは、ドラマとして措定する。それはダンカンによつて次のように描きだされる。「現代の新しい諸関係は、多数の観客のために日々刻々上演される社会ドラマである。観衆の規模の多様性を増大させれば、アピールの幅や多様性、なにかんづく強度もまた大きくしなければならぬ。そして同じ観衆を制御しようとする他者との競争の中でこれを行わねばならないのである。一方のアピールが変われば、他方のアピールも変わらなければならぬ。今日、永続性は変化の中に生起する。永続性と変化を切り離して考えるか、あるいはそのどちらか一方だけを考え、変

化を無秩序と混同する指導者は、早晚その権力を失うことになる。」(三九一四〇ページ) 端的にいうならば、社会的個人を砂のような大衆の中に位置づける社会理論から、同一化確認主体としての個人に切りかえず社会理論への志向がそこに伏在している。そしてこの「自己確認はドラマ的過程」なのである。

※※※

社会学理論におけるコミュニケーション理論あるいはシンボル分析の批判を通じて、自己の理論的構想を「序論」で提出したダンカンは、以下「公理的命題」、「理論的命題」、「方法的命題」の各章で、その構想を精緻化し体系化する試みをはたそうとする。

いうまでもなく公理的命題とは、その真偽の証明を前提としない定言である。ダンカンは「公理が暗黙のうちに設定されているために読者が自分でそれを探しださねばならないことがあまりにも多すぎる」としつつ、そうした公理は「ドグマとしてではなく、他者との会話や思考とよばれる内的な自我との対話における議論の手掛り」(四九ページ)として提出する。

理論的命題は、人間関係の社会ドラマとして構想されているモデルの構造ないし形式がその機能によつて規定されている、そのありさまを考える手掛りである。それは「人間関係の中で思考のもつ機能(関係の認知的側面)ではなく、行為のもつ機能を分析するために構成されている……」(七一ページ) 方法的命題の場合は、「われわれが知っているとしている事柄をいかにして認知することができ

るかということ論証すべきもの」であり、「社会関係が日常生活の社会ドラマの中で生起し、存在しつづけるのであれば、これらの関係を観察するにはどのような方法があるだろうか」(二七一ページ)という姿勢に対応すべきものである。

ここでは、各命題群をそのまま明細に紹介する余裕はもろくない。しかし、公理的命題は中野氏が指摘するように「ダンカンの社会理論は、基本的には観念論の流れにたつて、この系譜(社会統合への理論志向の系譜——内山補)を踏襲するものであり、社会を階統秩序として規定し、この『合理化』をめぐるイデオロギッシュな闘争に社会過程の核を見出そうとするものである。従つて、これは優れて社会理論であると同時に、社会意識論・社会心理学・知識社会学に対する多様な示唆を内包している」(二八八ページ)点を読みとらねばなるまい。

こうした命題群は、その命題設定の順位によつてそれぞれ対応しているわけではないが、それぞれの範疇で最初に何が命題化されているか、ということだけは挙げておきたい。

公理的命題Ⅰ 社会は有意義なシンボルのコミュニケーションにおいて生起し、それを通して存続する。

理論的命題Ⅰ 社会秩序と階統秩序を通してのその表現は、行為者が社会統合によつて「必要である」と考えている秩序原理を支持し、破壊し、変化させようと努力する一つの社会ドラマである。

方法的命題Ⅰ 象徴的行為の構造と機能に関するすべての論

述は、行為の象徴的文脈の中で論証されなければならない。この指摘だけでも、ダンカンが「秩序」の問題に目をこらしており、そうした秩序がシンボルに表象されるコミュニケーションの位相に重大に関連をもつとする立場が鮮明になる。

私はこうしたダンカンの問題意識が、まちがいはなくM・ヴェーバーのそれに連結していることを認める。ヴェーバーは、人間がなぜ秩序を要求するのか、という問題をその深部において育成していた。彼の「エトス社会学」がだからこそ人間における価値を追いつめていつたのである。そして「社会はシンボルを媒介にして機能するが、しかしシンボルを理解しその機能を知るためには、宗教をよりどころとしなければならぬ」(二七四ページ)とダンカンがいうとき、それはヴェーバーの宗教社会学をただちに想起させる。

しかしヴェーバーがすぐれて西欧的であるのに対して、ダンカンはすぐれてアメリカ的である。ヴェーバーのあの「合理化」概念が西欧に対して鋭利であつたのに比べると、ダンカンのキイ概念である「ドラマ」は構図的には明快であつても、鋭利性の点でははるかに劣つている。だがそれはダンカンの欠点とは必ずしもいえない。それはヴェーバーが人に切り込んでいつたのに対して、ダンカンが人間関係を射程におさめているからであろう。

さらに、発見さるべき社会や自然の真理と異なつて、創造さるべきものとしての芸術的真理がダンカンによつて強調され、「批判的精神の故郷としての芸術」がとらえられてくると、批判者≡芸術家

の現代的意義を通して芸術社会学の問題すら十分に浮かびでてくる。「社会における行為のモデルとして選ばれた芸術——演劇形式の芸術——の形式は、何にもまして、行為と熱情の形式である。芸術におけるドラマ、そして共同体における社会ドラマは、公共的理性の守護者である。なぜなら、われわれはそれらを通して生活の中の数多くの断絶に立ち向かうからである」(二七八ページ)となれば、ドラマトゥルギーとしての社会関係もまた想定しうることになる。

※※※※

私は本書をかなり違つた読み方をしたと思う。それは私ができごとを対象とする政治学ではなく、むしろ日常的生活営為としての政治を包摂する政治学を考えているからである。もちろん、それは、政治行動論が分析した制度的行動であつたり型でとらえられるようなものではない。たとえば「人間の自由とは、人間が自分自身で創りだしたシンボルをコミュニケーションする自由である」(二八〇ページ)といった意味で、人間が社会との連関で主体的である点をとりあげたい。

いいかえれば、人間はいかにして人間たらんとしうるのか、という点から出発したとき、私の思念は主観と客観の接合点に立つているといえるのではないか。今日の社会学は、犠牲とは、人々が相互の關係の中にある恐怖と罪とを払い除ける手段であるというところを、苦しみをもつて知ることから出発しなければならぬ」(四七ページ)とのダンカンの痛苦は、希望と恐れを鮮烈にしている現代の

ため、社会科学の在り方をよく表現するものである。私には、本書で述べられていることにたいする、共感と異和感の交錯の中でまだ脳内に浮遊している部分がかなり多い。しかし、私には分かる。この浮遊部分が私の中のどこに落下してくるかが。そしてその落下地点で立ちのぼる希望と恐れの業火が、何を照らし出すかは、私だけの楽しみなのだろうか。

（木鐸社刊、一九七四年、A5判二九二ページ、二千円）

内山秀夫